

經濟論叢

第119卷 第6号

マヌファクトゥア・ファブリーク・

ラボラトリーウム……………渡 辺 尚 1

TVA における草の根民主主義の構想……………佐々木 雅 幸 20

帝国主義形成期のイギリスの資本輸出と

「多角的決済網」……………中 村 雅 秀 41

財産の権威と国家の権威……………中 谷 武 雄 70

昭和52年 6 月

京 都 大 学 經 済 學 會

マヌファクトゥア・ファブリーク・ ラボラトリーウム

——J. M. ロイクス『商業の体系』（第2版，1817年）より——

渡 辺 尚

I 解 題

ドイツにおける産業革命の進展に対応して、マヌファクトゥアや工場等のもっとも基本的な諸概念がどのように生み出され、成熟していったかということについてのわれわれの知識は、まだきわめて貧しい。理論的にはたしかに、ドイツにおいても優に産業革命を見返す時点、1867年に出版された『資本論』第1部第12章「分業とマニユファクチュア」および第13章「機械と大工業」の両章によって、相対的剰余価値の生産という視点からの詳細な分析の成果に基く規定が与えられてはいる。しかし学術用語と業界(官庁)用語との乖離の傾向という一般的事情に加えて、ドイツの場合はイギリスやフランスの諸地域で先行する産業革命の成果を反映せざるをえない外来語と、ドイツ固有の発展を反映する自国語との使い分けという現象も発生してくるので、用語法は二重に混乱し、したがってマルクスのそれ自体としてはきわめて整序された用語法を、そのまま史料の読解の際に援用するわけにはいかない。ということは、無概念的把握を恐れる必要はないということでもなく、また史料に現れる、たとえばマニユファクチュアという語の表すものの実体が、マルクスの用語法にてらして、範疇的にはマニユファクチュアではないことを指摘しても無意味である、ということでもない。一步踏みこんで、それが同時代人によりマニユファクチュアと呼ばれた所以を明らかにすることが、この概念の歴史的興行きの深さを探るた

めに、索緒的意義を持つてであろうということなのである。もちろんマルクスが、19世紀のドイツばかりではなくイギリスにおいてさえも、マニュファクチュアや工場の用語法が混乱していたことについて、言及していないわけではない¹⁾。とはいえ、マルクス自身の用語法と19世紀の諸史料のそれとを対比すると、前者のもつ、精緻な理論的分析の帰結としてのすぐれて理念型的な性格と、そういう高度に抽象的な概念用語を、歴史分析に際してもほとんど保留なしに適用することを辞さないかれの用語法の特異性とは、否むべくもないのである。であればなおのこと、マルクスの理論的成果を一方でふまえながらも、さまざまな歴史的用語法について、それ自体として再検討してみることが必要であろう。

- 1) 『資本論』第1部、第4篇、第12章、第3節「マニュファクチュアの両基本形態——異種のマニュファクチュアと有機的マニュファクチュア」の中で、「ローマ帝国が遺した水車にあらゆる機械の基本的形態が認められる」というくだりに附した註43でマルクスは、「機械の全発達史は製粉機(場)の歴史によって辿ることができる。英語では、工場は今もなおミル〔ミューレ〕と呼ばれている。19世紀初めの数十年間に出たドイツ語の技術書では、ミューレという表現が、自然力でもって運転されるすべての機械ばかりでなく、機械装置を用いるすべてのマニュファクチュアまでも表すために使われている」と述べている。ところで下線部分は原著では、*Die Fabrik heißt im Englischen noch mill [Mühle]* であるが (Ausg. v. MELI, 1932, Bd. 1, S. 365). Samuel Moore & Edward Aveling の訳による英語版によると、*The factory in England is still a "mill"* (Progress Publishers, Moscow Vol. 1, p. 329) となっている。原著では、ドイツ語の *Fabrik* に当る英語は *mill* である、という意味にとることができるが、英訳では、英国では (原著では、英語では、であることに注意) 工場 (*factory*) のことを工場 (*mill*) と呼ぶ、といういささか無理な表現になってしまっている。この場合、理論的には *factory* 概念で把握されるべきものが、実際には *mill* と呼ばれている、という意味にとるほかはなく、*factory* という用語が工場を意味するものとしては、この時代にはなお抽象的な概念用語、あるいはせいぜい法律用語に留まっていたことをおのずから強調する結果になっている。

ちなみに、J. Roy による仏訳では、この部分は *En Angleterre, la fabrique porte encore le nom de mill (moulin)* となっており、やはり英国では、という表現に変えられている。なお興味深いことには、原註にはない次のようなフランスについての説明が、仏訳には付け加えられている。「フランス語では、ムラーン *moulin* という言葉は元来穀物の製粉を指すものとして用いられ、そのことから、一つの外力によって動き、物体にある強度の圧力を加えるすべての機械、すなわち粉砕機 *moulin à poudre*、製紙機 *à papier*、皮剥ぎ機 *à tan*、縮絨機 *à foulon*、撚糸機 *à retordre le fil*、鍛冶場 *à forge*、鑄造機 *à monnaie* 等を表すために使われている」と (Garnier-Flammarion, Paris 1969, Livre 1, p. 633)。マルクスは1875年のフランス語版への後書きで、J. ロアの仏訳に自分が手を入れたことを述べているので、フランス人読者のために、この部分はマルクスによって付け加えられたもののようである。

なお、日本ではマニュファクチュアに対してついに訳語が定着しなかった——昭和初年来のマニュファクチュア論争にもかかわらず——ことは、これが依然概念用語にとどまっていることを示している。このことは、日本における工場制度の普及速度にも関係していよう。

むしろ、現実の多面的で紆余曲折に満ちた工業発展の過程は、マスマファクトリアやファブリークのその時々業界用語としての用語法にこそ、一定の屈折をへながらも反映しているはずであり、実際のところ、そういう用語法に基いて各種の統計が作成され、あるいは経済事情についての同時代人による記述がなされている以上、それ自体として一定の資料的価値を持つ用語法の変遷を追跡することは、工業史分析にとって必要不可欠の準備作業といわなければならない。

以上のような関心から、筆者はすでに、工場概念について1830年代の例をいささか検討する機会を持ったが²⁾、本稿では Johann Michael Leuchs, *System des Handels*, Zweyte sehr vermehrte Ausgabe, Nürnberg 1817, Erster Theil, Bürgerliche Handelswissenschaft の序章の一部と、第1章から商品学 Waarenlehre および生産財 Waaren zur Hervorbringung の部分とを、しかも工業と工場制度に触れている計12節を、資料として訳出してみたい。本文だけでも通算890ページにわたる本書の、巻頭10ページ程度の一小部分にすぎないのではあるが、当時の用語法の一例を示すものとして、小さからぬ資料価値を持つと判断するからである。

本書の初版はすでに1804年に刊行され、これは、1933年にケルン大学のルドルフ・ザイフェルト Rudolf Seyffert 編集の『経営学史文献集』*Quellen und Studien zur Geschichte der Betriebswirtschaftslehre* の第5巻として復刻された。この初版と第2版との構成を比較すると、初版は2部から成るが、第2版では初版第1部第6篇が独立して第2部となり、初版第2部が第3部に回って、全体として3部構成となり、*Vollständige Handelswissenschaft in drey Theilen* と銘打たれている。ページ数も本文が576ページから890ページに大幅に増え、さらに第3部には194ページにもわたる文献目録が追加されている³⁾。このうち第1部、第2部は1817年に、第3部は1818年に発行された。な

2) 筆者稿「仕事場から「工場」へ」『経済論叢』第116巻、第5・6号、1975年。

3) この文献目録は *Anleitung zur Kenntniß der vorzüglichsten Bücher über den Handel und seine Hülfswissenschaften* と題されているが、とりわけ商業地理、旅行記、工場制度、

お、第3版が1822年に、第4版が著者の没後1839年に発行されたが、本稿では京都大学経済学部所蔵の初版復刻版と第2版とを利用した。

はじめに訳出部分、§ 2—§ 5 (S. 1-3), § 18—§ 24 (S. 12-15), § 34 (S. 24-25) および § 27 と § 28 の間に挿入された2つの注のうちの第1注 *Erste Anmerkung* (S. 17-19) の異同についてみれば、第5節第3段と注とが第2版で新しく付け加えられた部分である。本文については、表記法の違い（初版の *Manufaktur, Produkt, bei, Gerberei* 等が第2版では *Manufactur, Product, bey, Gerberey* 等に変っている）、ゲシュペルトの仕方、数ヶ所の副次的語句を除けば、*Producent, Manufacturwaare, Fabrikwaare* 等の表現方法に変更がみられるだけであり、文章そのものにはほとんど変更がない。

ところで本書は体系的な商業学 *Handelswissenschaft, Handlungswissenschaft* の樹立を目指した著作であって、生産過程自体は著者の主要な関心の対象ではない。しかし商業学体系の基点に商品学 *Waarenlehre* が据えられ、商品分類の基準としてまず作業場の三範疇を設定するために、ファブリーク等の概念規定が冒頭で行われるのである。それも作業場の概念規定をまず行い、それに基いて商品进行分类するというのではなくて、逆に生産過程における原料素材の変化の仕方から作業場を間接的に分類するにとどまる。しかしこれとても商品分類の基準としては不徹底であることから、視点は生産物の使用価値そのものに移さざるをえず、生産過程は視野の外に消えるのである。とはいえ、著者が作業場概念を直接的には規定していないことによって、かえってその理解については当時の一般的用語法に従っているとみなすことができるわけである。その限りにおいて、本書は19世紀初期の用語法の一例を、われわれに伝えてくれていると評価できるであろう。

さて、本書を史料として利用するにあたっては、次の諸点に留意する必要がある。

第一に、著者は作業場をマヌファクトゥア、ファブリーク、ラボラトリーウ

／商品学等についての文献一覧は貴重である。

ムに三分類するのだが、この三者間には生産力の発展段階の差を認めていず、それぞれの産出物の原料の特性に着目して区分しているのであるから、使用価値に重点を置いた作業場の類型区分にすぎない。しかしそれはそれなりに、歴史分析にとってはきわめて重要な意味を持っていると考えられる。というのも、使用価値視点は同時に産業構造分析の視点にもなりうるからである。歴史分析にとっては、生産力の水準（工業化の程度）と並んでその質（工業化の内容）も重要な関心事であるが、その生産力の質を規定するものは、産業構造の特徴的な骨組にほかならない。Manufaktur, Fabrik, Mühle, Werk, Hütte 等の雑多な作業場概念は、それぞれを生んだ固有の業種・部門の痕跡をなにごしかとどめているはずであり、これらが淘汰され、統一されていく過程を分析することは、ドイツにおける産業革命が前提にした原蓄期の分業構造の特質を探り、かつまた資本家的蓄積を実現する産業構造の展開の行方を見極める上で、無用のことではないであろう。

第二に、ロイクスは機械と人手との違いを、作業場分類に関するかぎりほとんど無視していることである。人手と道具と機械は同じ機械的範疇に入れられ、理論上マニュファクチュアと工場とを区別する標識である機械導入の有無は、分類基準としては採用されていない。決定的に重要なのは、加工対象自体の生産過程における反応であり、したがって生産過程が機械的か化学的かということが何よりも重要な関心事となる。問題はそれが妥当であるか否かではなく、なぜそのような関心が生まれたのかということであろうが、これまた当時の産業構造に対する、同時代人の特殊な関心が投影しているとみられるのである。一般に化学反応が一定の高温の持続を条件とするかぎり、化学的過程の検討に際しては熱経済が、当時としてはとりわけ石炭消費が問題とならざるをえないだろうから、化学的なものへの社会的関心の増大は、一般に石炭関心の増大に、したがって石炭鉱業の興隆に対応するともいえそうだからである⁴⁾。

4) ロイクスの化学に対する強い関心は、後述のようにかれが薬味商のもとで徒弟奉公をし、独立して薬種、薬味、植民地物産の卸売を手広く営んだことにも影響されている。一般にこの種の商品の登場が、ドイツにおける商業発展一般をいかに強力に推進したかは筆者がすでに指摘／

第三に、作業場については一応三類型が設定されはしたものの、生産（過程）それ自体を示す用語は、かれの叙述においても混乱していることである。加工あるいは製造を表す用語として、bereiten, zubereiten, bearbeiten, hervorbringen 等が用いられているが、これらの用語法はかなり不統一であり、たとえば機械的工程と化学的工程に対応させて使い分けしているというわけでもない。したがって、それぞれに相異った訳語をあてることも、本書においてはあまり意味があることでもなかろう。ただ、もっとも頻用される語が bereiten であることは、これが騎行 reiten の縁語であるだけにまことに興味深い⁵⁾。

最後に、工業史分析にとり商業文献がもつ資料価値の問題が残る。一般にこの種の文献では流過程が主たる関心の対象となり、生産過程は副次的にしか扱われていないことは確かである。しかし当時の商業 Handel の意味はきわめて広く、しばしば経済もしくは経営一般 Wirtschaft を指す語として使われたことも忘れられてはならない。むしろわれわれの関心をそそるのは、ドイツにおいても18世紀頃から「商業」知識の体系化が、教科書、ハンドブック、辞典等の著述、編纂の形で、実務体験を持つ人々によってさまざまに試みられていることである。19世紀末、経済学 Volkswirtschaftslehre が国家学 Staatswissenschaftslehre から分化した過程に踵を接して、経営学 Betriebswirtschaftslehre の自立化も始まるのであるが、18世紀以来の商業学の発展は、そ

↘したところであるが（筆者稿「羊毛から綿へ」『経済論叢』第119巻、第3号20ページの注43を参照）、化学（工業）の発展（今日西ドイツの産業構造における化学工業の比重の大きさは周知のことである）にも強力な刺激を与えたことが考えられるとすれば、この業種の果たした役割はまことに大といわなければならない。その一例を示す。前掲論文の注34（15ページ）で紹介したドゥイスブルク市の Friedr. Curtius は、『住民録』で Fabrik in Vitriol u. chemischen Präparaten と表示されているが、ハーバーの『化学工業史』の中でも「エーダーラインで最初の硫酸工場」として挙げられていることを、室蘭工業大学の水野五郎教授から御教示いただいた。ドゥイスブルクは Spezerei- u. Marterialhandlung と石炭輸送とのライン地方における一大拠点であったが、ここで化学工業発生の期の一つの「革新」が行われたことは、きわめて興味深いことである。また後注39で挙げるエルバーフェルトの Karl Heyder の経営例も参照せよ。

5) bereiten は今日でも皮を鞣す意味に用いられるが、同義語の gerben が金属精錬をも意味することに注意。皮革製造と金属精錬とはその工程の特徴に高度の共通性を持つと認められていたようで、ロイクス自身第二範疇ファブリックの実例としてまず皮革製造、ついで金属製造を挙げている。「皮を鞣す」ことが homo faber に対して持つ意味は無視しえないようである。

の学説史的原著過程とみることもできるのである。そして国家学の前身たる官房学 Kameralistik が、いわば「上からの」経済学であったとすれば、商業学は「下からの」経済学とでもいわれるべき性格のものであった。しかもこの商業学は、ドイツ特有のあの伝統的職人制度と結びつきながら、「商人」教育の手引きという実践的目的を掲げていたため、一定の実学的・技術学的性格をおのずから備えていたことも見落せない。それだけ、経済界の実態を反映する度合もまた強くなるというものである。この意味で商業学文献は、ほぼ同じ頃よりドイツ各地で活潑に編纂され始めた、夥しい地誌 Topographie の類とともに、工業史・産業史研究にとってきわめて大きな資料的価値を持つといえるのである。

なお本書の著者ロイクスについては、初版の復刻版に附せられたザイフェルトの手になる小伝によって、知ることができる⁶⁾。

それによると、ロイクスは1763年7月2日 Ansbach 近郊の Bechhofen で生まれ、1836年12月19日に74歳で没した。かれは1774年、11歳の時薬味商 Spezerei-handlung を営むニュルンベルクの親類のもとに徒弟として住みこみ、以後8年間の徒弟期間中に、寸暇を惜しんで読書と勉学に励み、並の学士以上の学識を身につけたという。自然科学では、当時なお生成期にあった化学にとりわけ関心を示したというのも興味深い。1782年に徒弟期間終了後、ドイツ各地、ネーデルラント、フランスを遍歴し、ニュルンベルクに戻ると1784年から1791年まで薬種商 Drogen-und Apothekerwarenhandlung のもとで職人 Angestellter として勤めたが、この間とくに商業学の研鑽に励み、1791年には最初の著述にして、後年の『商業の体系』の原型といわれる *Allgemeine Darstellung der Handlungswissenschaft* を刊行した。同年独立してニュル

6) *System des Handels von Johann Michael Leuchs*, Faksimilidruck der 1. Auflage von 1804. Mit einer Einleitung: Johann Michael Leuchs. Als Handelswissenschaftler von Rudolf Seyffert in: R. Seyffert (Hrsg.), *Quellen und Studien zur Geschichte der Betriebswirtschaftslehre*, Stuttgart 1933, Einleitung, 1. Lebenslauf des Johann Michael Leuchs (S. V-XV).

ンベルクに植民地物産卸売 *Grosshandlung in Material-und Kolonialwaren* を開業、1794年には出版事業に手を挙げ、*Allgemeine Handlungs-Zeitung* を発刊し、さらに1795年には商業学校 *Handlungsakademie* を開設するにいたった。1807年のある人名録によれば、かれの経営内容は *Drogerie; Materialwaren en gros (Materiallisten); Spezereien en gros; Kommissionäre und Spediteure; Wechselhandel (Bankiers)* とされ、さらに一時はタバコ製造をも手がけたほどの多角経営ぶりであった。事業経営、学術研究そして実践教育を同時にやってのけたロイクスに、われわれは逞しい商人型知識人——ドイツには少なからず見出される——の典型を見ることができるのである。しかし、やがて経営を息子に任せ、1804年から1826年までは学問的著述に専念した。その最大の仕事が、1804年に初版刊行以来、没後に至るまで4版を重ねた主著、*System des Handels* であった。これは自らの出版部から発行したのだが、第3版までで4500部を売ったと言う。ザイフェルトは、1676年の Jacques Savary, *Le Parfait Négociant* (1675年) の独訳 *Vollkommener Kauff-und Handelsmann*, 1752年の Carl Günther Ludovici, *Eröffnete Akademie der Kaufleute* および1804年の Leuchs, *System des Handels* の三著を、経営学史の「体系的商業学の時期」*Periode der systematischen Handlungswissenschaft* における最重要文献としているが、とりわけ本書を学術的価値のもっとも高いものと評価している⁷⁾。

なお翻訳に当っては、ゲシュェルト部分はゴチックに、また原語を附加する場合には、訳語部分に下線を施した。

II 翻 訳

序 文

§ 1 略

§ 2

7) *Ibid.*, S. III-V.

ただ肉体的欲求だけが、ここではわれわれの考察の対象になる。これに関らなければならない階層 Stand をわれわれは次の三階級 Klasse に分けることができる：原料生産階級 hervorbringende, 製造階級 bereitende, 分配階級 vertheilende.

§ 3

原料生産階級には、自然産出物 Product を獲得 abgewinnen し、あるいは採取 sammeln し、それを未加工 roh のままか多少加工 verändern した状態に置くような人々を指す。非都市産業 Landwirthschaft⁹⁾ という語で(都市産業 Stadtwirthschaft⁹⁾ と対置して)理解されるあらゆる職業 Beschäftigung はこれに属する。たとえば耕作農業 Landbau, 牧畜 Viehzucht, 漁業 Fischerey, 鉱業 Bergbau¹⁰⁾ 等。自然産出物の獲得に従事する人々は、かくて他の階層と対比して原料生産者 Hervorbringer (Producent)¹¹⁾ と呼ぶことにしたい。

§ 4

製造階級には、原料生産物 rohes Erzeugnis を製造・加工 bearbeiten, verarbeiten, zubereiten, zusammensetzen して¹²⁾さまざまな目的に供されるようにするすべての人々が含まれる。手工業 Handwerk, マヌファクトゥア, ファブリーク, 工芸 Künste はこれに属する。この階級に対しては、第一の階級に対してと同様、統一的な呼称がない¹³⁾。そこで、この部門に従事する人

8) 初版では、Landökonomie。農業という訳語をあてない理由については注10を参照。

9) 初版では、Stadtökonomie。直訳すれば都市経済であるが、ここでは産業部門、業種、職種が問題にされているのであるから、内容的には製造階級と分配階級とが従事するものを指す語と解して、商工業と訳すことも可能であろう。

10) 現在、鉱業は工業と一括されて Industrie の範疇に入れられ、Agrikultur, Landwirthschaft とは明確に区別される。しかし19世紀の初期には、農業と同一の範疇に入れられた例がここで示されていることは興味深い。したがって Landwirthschaft も最広義に解すべきで、農業という訳語をあてるのは、ここでは不適当であろう。

11) 初版では Hervorbringer という語がなく、ただ Producent になっている。なお hervorbringen に生産一般ではなく、原料生産(非製造的生产)に重点を置いた語意を与えるとするれば、後出の商品分類の際に、生産財を Waaren zur Hervorbringung とするのは適当な用語法とはいえないだろう (§ 34)。

々を製造業者 Bearbeiter, 加工業者 Stoffbereiter と呼び、この職業 Geschäft 自体を原料加工 Stoffbereitung と呼ぶことにしたい。

§ 5

最後に第三の階級、分配階級は、生産物 Erzeugniß¹⁴⁾ の交換、不足と過剰の調整と是正、商品の分配に従事する人々から成る。かれらは商人 Handelsleute と呼ばれ、その職業 Geschäft は商業 Handel と呼ばれる。

商人階層 Handelstand¹⁵⁾ はそれゆえ生産物 Erzeugniß の分配に従事する。それは一地域の生産物 Product の過剰を除去し、同時に他地域の不足を埋める。このことによってそれは、異なる諸地域、諸国家、諸民族間の交易 Verkehr の仲介者、工業 Gewerbefleiß¹⁶⁾ や貨幣流通の推進者となり、貨幣制度の整備¹⁷⁾のための、また労働¹⁸⁾の均等な配分のための行政 Staatsleitung の手段にさえる。

古人は全階層 Stand を三階級 Klasse に¹⁹⁾、知識階層 Lehrstand、軍人階層 Wehrstand、生産階層 Nährstand に分けた。ただ国家の金に頼って生活し

12) この関係文は第2版では、welche die rohen Erzeugnisse……であるが、初版では、die die rohen Produkte……となっている。

13) 第三階級、すなわち商人については Handelsleute という呼称が確立しているのに対して、第一、第二階級に対してはその呼称が確立していないことは、そのまま生産概念がまだ成熟していないことを示す。それは産業構造が流動的であることの反映でもあろうが、むしろ興味深いのは、生産概念に先駆けて流通概念が成熟していたことである。もちろん産業資本 (Industrielles Kapital はドイツ語の本来の意味においては、むしろ工業資本と訳すべきであろう) の登場に商人資本が先立つことは、経済史の常識ではあるが、工業生産一般の概念が、産業資本の確立をもってはじめて成熟したかにみえることが関心をひくのである。工業 Industrie なるものの本質を、したがって社会の工業化 Industrialisierung というこの意味を、さらには工業人 homo faber なるものの歴史的意義を把握する上で、留意されるべきことではあろう。

なお Industrie の用語法については稿をあらためて論じたい。

14) 初版では、Produkt。

15) この第5節の第2段は、初版と第2版とで表現の違いが目立つ。第1文節は初版では、「商人階層の業務は、それゆえ生産物 Produkt の分配にある」という表現になっている。

16) 初版では、Gewerbefleiß が Industrie。 Gewerbefleiß は Industrie より古い用語であるにもかかわらず、第2版でなぜ後者を前者に置き変えたのか、興味深いことではある。とまれ、商業によって工業が振興するという理解が、ここで明白に示されていることが留意されるべきである。

17) 第2版では、Anordnung des Geldwesens が、初版では、Regulierung des Geldwesens。

18) 第2版では、Vertheilung der Arbeiten が、初版では、Vertheilung des Gewerbefleißes。

19) 以下の段は第2版で新しく附け加えられた部分。

ているような国家の寄食者 Kostgänger (年金生活者 Rentenierer, 利子生活者 Rentner, 高利貸 Kapitalist²⁰⁾) は元来国家の不自然な構成員であり、この分類には含まれていない。われわれがここで問題にするのは生産階級だけであり、これをさらに三群に分類したのである。

§ 6 以下中略

商品学

§ 18

特別の交換手段、あるいは本来の意味における商品は、序文で明らかにされたように、未加工品 roh および加工品 bereitet に分けられる。そして前者はさらにその起源によって、植物性・動物性・鉱物性商品に分けられる。植物界は根、木材、(桂皮のような) 白木、(キナ皮のような) 樹皮、草本、花、(穀物、コーヒー豆のような) 種子、樹脂、ゴム等を提供する。また動物界からは、毛皮、蹄、(象牙等のような) 歯牙、角、羊毛、獣毛、獣脂等が得られる。同様に鉱物界からは、鉱石、金属、石材、土、(琥珀、硫黄、鉱性タールのような) アスファルト Erdharze、塩等を得る。

§ 19

加工された商品 zubereitete Waare はその製造 verfertigt werden のために使われる素材 Stoff によって分類されたり、加工方式 Zubereitung 自体によって分類されたりする。後の場合には²¹⁾、商品はマヌファクトゥア製品 Manufacturwaare とファブリーク製品 Fabrikwaare とに分けられ、前者の製造場は、マヌファクトゥア、後者のそれはファブリークと呼ばれる。この両者に与えられる概念規定はきわめて多義的である。

ファブリークとマヌファクトゥアという語で、時には製造業に従事する諸階

20) ここで Kapitalist が国家の寄食者、すなわち不生産的階層として扱われ、生産的階級に属する商人階層と峻別されているのは興味深い。この場合、Kapitalist は貨幣資本家、たとえば個人金融業者等を指すとは思われず、ロイクスの小伝で触れたように、かれ自身向替商をも営み、銀行家 Bankier とも呼ばれていたので、この Kapitalist には単なる貨幣資本家とは別の意味がこめられていたと理解すべきであろう。高利貸は仮訳である。

21) 第2版では、In der letzten Beziehung が初版では、Nach der……。

層 zubereitende Klassen の構成原理と経営原理 Verfassungs-und Leitungsgrundsätze (工業経営 Gewerbsleitung) だけが意味される²²⁾。時にはこの語によって、未加工品あるいは自然産出物に対する加工品 bereitetes Product が意味される²³⁾。時には設備 Zurüstung の規模と、一つの目的のために共通の指揮の下で結合されたさまざまな職種 Arbeit の数が重視され、前者はこれにより手工業から区別される²⁴⁾。時にはこの語によって、一つの物を製造する Hervorbringung ための相異なる作業の分割 Vertheilung あるいは個別化 Vereinzelung が意味される²⁵⁾。時には両者は部分的にこの後の意味で²⁶⁾ 使われるが、とりわけ加工方法あるいは加工手段 Art oder das Hilfsmittel der Bearbeitung に注目される。

この最後にあげた、そしてもっともよく使われる gewöhnlichst 意味においては²⁷⁾、ファブリークとは商品が火 Feuer、鎚 Hammer 等によって加工される zubereitet 作業場のことである。そしてマスマファクトゥアとは、加工 Zubereitung が労働者の手あるいは機械 Maschinen によって行われる作業場の

22) これだけでは Verfassungsgrundsätze と Leitungsgrundsätze との正確な意味は確定できないが、前者は製造業階層が構成する産業部門(したがって工業)、後者はその経営形態を指すものとしてよいであろう。とまれここでは、ファブリークもマスマファクトゥアも、工業経営一般という概念に一括されている。

23) マスマファクトゥアが工業製品を表す例は少ないが、ファブリークもまた製品概念でありうることを指摘した例は、筆者には初見である。

24) ここでもマスマファクトゥアとファブリークとが経営形態として同一視され、とりわけ大規模な固定資本の投下ということによって、ともに手工業から区別されていると読みとることができる。しかし第一の特徴である die Menge der verschiedenen, unter gemeinschaftlicher Leitung zu Einem Zwecke zusammen verbundenen Arbeiten (初版では Einem はゲシュペルトになっていない) とは、分業に基く協業、すなわち集中作業場での作業場内分業を指すのか、外業部的ないしは、問屋制家内工業的分業、すなわち広義の経営内分業を指すのかは定かでない。

25) この場合も両者は同一範疇にいれられているとみてよい。しかし「相異なる作業の分割あるいは個別化」とは、具体的には作業場内分業あるいは問屋制的分業のいずれを指すのか、あるいは両者を同時に指すのかは定かではない。Einem は、初版ではゲシュペルトではない。

26) 「後の意味で」in den letzten Bedeutungen は複数形であるから、以上あげた四つの用語法のうち、分業形態を問題にした後二者の意味で、と解してよいだろう。

27) マスマファクトゥア、ファブリークの用語法をロイクスは5例挙げたわけだが、そのうちの4例では、両者の相違は問題にならず、五番目の用語法においてのみ、しかもそれがもっとも一般的なそれであると明言した上で、両者の区別が問題にされるのである。

ことである²⁸⁾。

§ 20

加工商品 zubereitete Waare のこのような分類はきわめて不正確なものであり、たとえその製品 Product が商業の対象とはならないすべての製造業者 Bereiter, つまり本来の手工業者²⁹⁾ がこれから排除されるのは当然だとしても、すべての加工商品 bereitete Waare をこれをもって把握することはできないので、そこで一層正確で一層完全な分類を試みてみたい。たとえそれが今すぐにも利用できるものではないにしても。この場合、加工 Bereitung に際しての建物 Anstalt, 経営 Leitung, 作業手段 Hülfquelle にではなく、加工の際の素材の反応 Verhalten des Stoffes に注目したい。そこで広義のすべての製造品 Kunstproduct を三群に分類する。つまり機械的 mechanisch (マヌファクトゥア製品)・機械的-化学的 mechanisch-chemisch (ファブリーク製品)・化学的製品 chemische Waare にである³⁰⁾。

§ 21

I 機械的製品, マヌファクトゥア製品 (この作業場はマヌファクトゥア)³¹⁾ とは、この加工 Bereitung の際に、労働者の手 Hand あるいは機械

28) すでに前掲筆者稿で紹介したように、1830年代刊行の他の資料の説明もこれとほぼ一致する。これによれば、ファブリークは、①作業場、②大規模経営、を意味するが、とくにマヌファクトゥアの対語として、③「とりわけ鉱物から製品が、しかも火と鎚によって製造され verarbeitet, 加工される zubereitet werden 作業場を意味する」。これに対しマヌファクトゥアは、④作業場、⑤製品、を意味するが、前者は「商品が手作業労働者 Handarbeiter によって、あるいはそのような労働者の手で動かされる機械によって製造され verfertigt, 加工される zubereitet werden 作業場」をいい、後者についてはその製造と生産 Verfertigung und Hervorbringungの際に、鎚も火も使わない製品を意味する」と。Albert Franz Jöcher, *Die Handelschule, Real-Encyclopädie der Handelswissenschaften*, Quedlinburg und Leipzig, Bd. 1, 1833, S. 135-136, 156.

29) 本来の手工業者の製品は「商業の対象にはならない」nicht in den Handel kommen という理解のうちに、逆に商業と結びつくマヌファクトゥアや工場が一定の市場規模を前提としたものであることが、したがって市場構造が概念構成にとって不可欠の要素であることが暗示されている。

30) 初版では、ゲシュペルトになっではいるものの、ただ Manufakturwaaren, Fabrikwaaren, Chemische Waaren とあるだけである。

31) 初版では、Manufakturwaaren とあるだけである。

Maschine と道具 Werkzeug とがすべてのことを、あるいは少くともたいていのことを行わざるをえないものをいい、その際素材はほぼ完全に受身に *leidend* 回る³²⁾。この加工 *Bereitung* に際しては、それゆえすべてが化学的ではなく、むしろ機械的に行われる。この群に属するのは、たとえばすべての木材は加工 *Holzbereitung* (篩製造、箱製造、製材、籠製造、彫刻、ろくろ細工)³³⁾、織物製造 *Gewebebereitung* (紡糸、織布、編物)³⁴⁾、さらにすべてのミューレ (搗碎場 *Stoßmühle*、製粉場 *Mahlmühle*、搾油のような圧搾場 *Preßwerk*)³⁵⁾、銅版彫刻等である。このような加工方式 *Zubereitungsart* によって得られるすべての製造品 *Produkt* は、この分類によると³⁶⁾ マヌファクトゥア製品と呼ばれるべきものである。

§ 22

II 機械的・化学的商品あるいはファブリーク製品 (この作業場はファブリーク)³⁷⁾ とは、その生産 *Hervorbringung* のために素材の力と労働者とが等しく寄与するもの、それゆえ同時に化学的³⁸⁾かつ機械的に作用するものである。この種のものを提供するのは、皮革加工 *Gerberey*、金属加工 *Metallbereitung*、ガラス・タバコ製造 *Glas-und Tabaksbereitungen*、捺染等である。

§ 23

III 化学的製品 (これの製造場はラボラトリーウム *Laboratorium*)³⁹⁾ とは、

32) 原文 *wobey sich der Stoff verhältnißweise ganz leidend verhält* は、前出 *Handelsschule* のマヌファクトゥアの説明、*wobei sich also die Stoffe ganz leidend verhalten* とほとんど一致するのが注目に値する。なお前出筆者稿では、この文を「素材が徹底的に変形される」と仮訳しておいたが、これは適訳とはいえず、「素材が完全に受身に回る」という訳に訂正する。

33) 初版では、*Drechslerrey* の後に *u. s. w.* が続く。

34) 初版では、*Stricken* の後に *u. s. w.* が続く。

35) 初版では、*als Oelschlagen* の後に *u. s. w.* が続く。

36) *nach dieser Eintheilung* が、初版では、*nach unserer Klassifikation*。

37) 初版では、ただ *Fabrikwaaren* とだけある。

38) 初版では、*ゲシュペルト* になっていない。

39) *Laboratorium* は、今日自然科学分野の研究室や実験室を指すが、元来医学用語として16世紀に生まれた言葉であり (*Der Große Duden 7, Etymologie*, Mannheim 1963, S. 382)、ラテン語の *laborare* (arbeiten) に由来する。当時、化学製品の製造場が、実際にラボラトリーウムと呼ばれた例はないわけではない。たとえば1834年の『ラインラント・ペストファーレン公認住ノ

その製造 Hervorbringung のために素材の性質あるいは力がすべてを行い、労働者はそれをただ適当に組合せることだけができるようなものをいう。これに属するものとしては、あらゆる発酵工業 Gährungsbereitung (蒸溜、ビール醸造、焼酎蒸溜、製酢等)、染色、あらゆる結晶工業あるいは塩類製造 Krystallisation oder Salzbereitung (炭酸カリ製造 Pottaschensiederey, 硫黄製造 Salpetersiederey, 明礬製造 Alaunsiederey, 製糖 Zuckersiederey), 石鹼製造 Seifensieden 等である。

この分類によっても厳密な区別を行うことができないことは確かである。しかし自然というものはいかなる区別や分類をも持っていない。われわれが自分の知識を容易に概括できるように、この分類なるものを行うのである。

§ 24

未加工商品をその由来にしたがって動物性、植物性、鉱物性⁴⁰⁾に分類することは (§ 18)、博物学 Naturgeschichte にとっても旧来の商品学 Waarenkunde⁴¹⁾ にとっても有効である。同様に 加工商品 zubereitete Waare をマヌファクトゥア製品、ファブリーク製品、化学製品とに分類することは、技術学 Technologie にとってもとりわけ利用価値が大であろう。しかしわれわれの目的にとっては、すなわち商品学 Waarenlehre の確立のためには、両分類とも無用である。だから新しい分類方法を考え出さなければならない。

§ 25 以下中略

注 1⁴²⁾

『民録』ではエルバーフェルトの Karl Heyder 経営が、Material-u. Farbwarenhandlung u. Chemisches Laboratorium と表示されている。Rüttger Brünig/Goswin Krackrügge(Hrsg.), *Offizielles Adres-Buch für Rheinland-Westphalen zum Vortheil armer Kranken*, Elberfeld 1834, S. 73. ハイダーが化学製品生産と Materialwaaren の卸売業とを兼営していることの意義については、注 4 を参照。なお英語圏では、製薬会社が時に laboratories と称する。

40) 初版では、ゲシュペルトになっていない。

41) § 26 に第 2 版で附した註にいう：「従来 Waarenlehre の名によって提供されてきたものは、われわれの理解によれば、単なる Waarenkunde, すなわち 商品の特徴と性質の記述にすぎない。」S. 16.

42) 第 2 版で附け加えられた部分である。

われわれは素材加工 Stoffbereitung のための作業場をマヌファクトゥア、ファブリーク、ラボラトリーウムに分類し、その製品 Product をマヌファクトゥア製品、ファブリーク製品、化学製品と呼んだ。この三者間の基本的相違は、加工 Bearbeitung の際の素材の反応に求められた。

われわれの分類によると、マヌファクトゥア製品とはその製造 Hervorbringung のために単に機械的作用が必要とされるもの、あるいはその製造のためにただ機械的に作用する諸力だけが使われるものをいう。

ある力が機械的であるとは、それがただ外面の形態と量とを通して、可視的運動（衝撃 Stoß, 圧縮 Druck 等）によって作用する場合のことをいう。

そこで、挽き Sägen, 磨き Feilen, 衝き Stoß, 搾り Oelpressen, 突き Kupferstechen, ろくろ加工 Drechseln は機械的作用である。というのは、器具 Instrument や機械 Maschine は、もっぱら圧縮や衝撃によってその機能を果すからである。これに対して化学的とは、ある作用が形態や可視的運動（衝撃、圧縮等）によってではなく、素材の性質 Beschaffenheit によって、その本質と固有の力によって生み出される hervorgebracht werden ものをいう。

たとえばあらゆる結晶作用 Krystallisation は、塩分子相互間の固有の吸引力によって生ずる。また染色は染料の生地に対する親和性（吸着 Anziehung）によって行われる。同様に蒸留 Destillation は、揮発性部分が熱素 Wärmestoff と比較的容易に結びついて気化 Dämpfen (Luftförmigkeit) し易いということによって引き起される。さらにガラス原料 Fritte (珪石 Kiesel, 木灰 Pottasche (カリウム), ソーダ (ナトリウム塩 Natron) は、加熱されて結合し、ガラスとなる。これらすべてのことは素材自身の力によって起きるのである。

以上のことから、加工商品 bereitete Waare を素材の反応によって分けるわれわれのやり方も、今や理解してもらえらるであらう。

マヌファクトゥアにおいては、それゆえ機械 Maschine, 器具 Instrument,

労働者が素材に働きかける。それらはただ外面的、可視的動きによってのみ、それゆえ機械的にのみ作用できるのである。その際素材は受身である。(§ 21)

ラボラトリーウムにおいては、機械も器具も人間も素材に作用を及ぼさない。素材が自己の力によってすべてを行う。労働者は素材と一緒に揃えるだけであり、機械と器具とは素材の自己変化を任意に制御できるだけである。

ファブリークは一つの目的のための両者の（マヌファクトゥアとラボラトリーウムとの、機械的力と化学的力との）結合である⁴³⁾。

そこでたとえば、皮革加工 Lederbereitung では醗酵（化学作用）によって体毛が分離し、機械的手段によって除去される。ついで収斂剤によって一方では原皮を腐敗から防ぎ、他方ではその繊維を収斂させ（両方共化学的作用）、ついで搗き晒し Walken（機械的）によって、収斂剤が一層浸透しやすいようにする。

われわれの分類は同時にまた、マヌファクトゥア主 Manufacturist, ファブリーク主 Fabrikant, ラボラトリーウム主 Laborant が（商人としてではなく技術家 Künstler として）持たなければならぬ知識をも指し示す。

すなわちマヌファクトゥリストには、機械的知識、あるいは機械体系 Maschinenwesen の知識が必要である。ラボラントには化学的知識、あるいは単一および合成素材の性質 Natur der einfachen und zusammengesetzten Stoffe についての、その単体および合成体での作用についての、その分解と結

43) ここにファブリークが他の用語を抑えて、一般性を獲得する可能性が示されている。というのも、すべての工程は比重の相違はあっても機械的・化学的作用の両面を具えており、少くともすべての製造業の業種は、機械的工程と化学的工程との組合せから成るということが出来るからである。そしてファブリークが、火（化学的作用の象徴）と鋸（機械的作用のそれ）を用いることに本来の特色を持つとすれば、このファブリークがマヌファクトゥアやラボラトリーウムに優る一般性を持ちうることは、容易に予想されることである。この点について、筆者は前出論文で次のように考察した。すなわち「Manufaktur の場合は手作業の側面が強調されるため、機械が手労働の熟練に代わった時点においても、手の延長としての作業機の生産過程における機能の具体性から関心をそらすことがかえって困難であったであろう。……これに反し、Fabrik は「火の使用」＝加熱装置の意義が前面に出てくるため、これに逆比例して手作業の意義が後退し、比較的容易に「大量生産」という抽象的・量的規定性を獲得しやすく、したがって大規模経営の意味もより明確に持つことができたからであろう」と（前掲論文、57ページ）。手の使用は商品の使用価値的特殊性への関心を残しやすく、逆に火の使用はそれを弱める可能性があるとして、

合についての知識が必要である。

最後にファブリカントは、化学的かつ機械的知識を同時に持ち合わせなければならない。

この結論は、素材加工場 Stoffbereitungsanstalt についてのわれわれの見解が、いかに有用でありかつまた正当であるかということを証明するものである。というのも、この把握からただちに学問的要請が生まれるからである。

注2 以下中略

§ 34

生産財 Waaren zur Hervorbringung

何らかの営業に必要とされる物⁴⁴⁾ (道具 Handwerkszeug, 器具 Instrument, 機械 Maschine) は労働を軽減し、その速度を速め、あるいはそれをそもそも可能にするという目的を持つ。このような物に対する主な要請は次のごとくである：

- 1) 力の節約⁴⁵⁾、それゆえ使用に際して軽量で便利なもの。
- 2) 時間の節約⁴⁵⁾、それゆえ高速性。
- 3) 空間の節約⁴⁵⁾。
- 4) 作用の規則性と均等性。
- 5) 一般的合目的性：つまり果さなければならないことを、実際にかつ完全

\\ 把え、したがって火を使用するファブリークの方が、価値生産の場としての一般性も獲得しやすいだろうと考えたわけである。これに対し、ロイクスによればファブリークは手と火とを同時に使用するために総合的な性格を持ち、したがって一般性を獲得しやすいことが暗示されているのである。かれの立場からは、筆者の理解からすればロイクスのいうラボラトリーウムが一層一般性を獲得しやすいはずではないか、との批判も成り立つであろう。もちろん工場概念の成熟過程には、非技術的諸要因も複雑に働くはずであるから、前稿における筆者の考えをただちに修正する必要は認めないが、この問題に関してはなお検討の余地が大きく残されていることだけは確認しておきたい。

44) ロイクスは、商品学の確立のためにより合理的な商品分類を行わなければならないとして、①食品 EBwaren, ②衣類 Waaren zur Bekleidung, ③耐久消費財 Gemächlichkeitswaren ④生産財 Waaren zur Hervorbringung の4分類を提唱する。このうち生産財に関する第34節を訳出するが、ここで重要なことは、道具、器具、機械の間に本質的な相違を認めていないことである。これは人手と機械との間に差を設けなかったかれのマスファクトゥア概念と対応する。

45) Ersparung an Kraft 等が、初版では、Ersparung der Kraft 等。

に果すこと。

6) 耐久性、そして最後に、

7) 副次的なことではあるが形の良さ。

いかなる器具、いかなる機械等もこの上なく簡便で、最小の力で、もっとも短時間に、この上なく確実に、その完全な作用を生み出さなければならない⁴⁶⁾。このことから機械、器具類の価値と等級の相違が生ずるのである。

§ 35 以下略

46) ロイグスは、生産財として道具と機械との間に本質的相違を認めていなかったと同様に、機械と装置との間にも本質的相違を認めていなかったようである。注1で述べられているように、マスマファクトゥリストに要請されるのは労働手段についての機械的知識であるが、ラボラントに要請されるのは労働対象についての化学的知識である。ラボラトリーウムにおける装置の独自の重要性を指摘しなかったのは、かれにしては手落ちの感を免れないが、これはおそらく化学工業の初期において労働手段について求められた知識は、液槽や反応基の耐熱性や耐酸性についてのそれである以上に、部品相互間の機械的機能連関についてのそれであったことを物語るものであろう。